

新編

國語讀本

尋常小學校  
兒童用

卷六

福岡縣立師範學校  
圖書

國語部

冊數	八
番号	二
架號	

圖書 和圖書 遡



a 1 3 8 0 3 2 8 0 5 8 a

福岡教育大学蔵書

T1A3

10

Ko97j



小山左文二合著  
武島又次郎

新編 國語讀本 尋常小學校 兒童用

東京 株式會社普及舎

新編 國語讀本 尋常小學校 兒童用 卷六目次

第一	東京見物のあんない	一
第二	靖國神社	五
第三	ゐなか	九
第四	「ゆけゆけ」と「來い來い」	十一
第五	里の小川の氷車	十四
第六	山林ノハナシ	十七
第七	きのことりにさとふ	十九
第八	石炭と石油	二十一
第九	大阪ノハンジョー	二十一
第十	かまどのにぎはひ	二十九
第十一	少女母をすくふ	三十一
第十二	たすけぶね(一)	三十六



第十三	たすけぶね	三十九
第十四	竹	四十三
第十五	としよりのつぎ木	四十五
第十六	モノイフオシトジヲヨムメクラ	四十九
第十七	學校用品	五十二
第十八	本を借る	五十五
第十九	雪	五十七
第二十	なんぎはくすり	六十一
第二十一	大椿 <small>ダイシュン</small>	六十四
第二十二	紀元節 <small>キゲンセツ</small>	六十七
第二十三	神武天皇の御東征	七十一
第二十四	キンシンクンショー	七十三
第二十五	宇佐 <small>ウサ</small> の御使	七十六

京 里

新編國語讀本 尋常小學校用 卷六

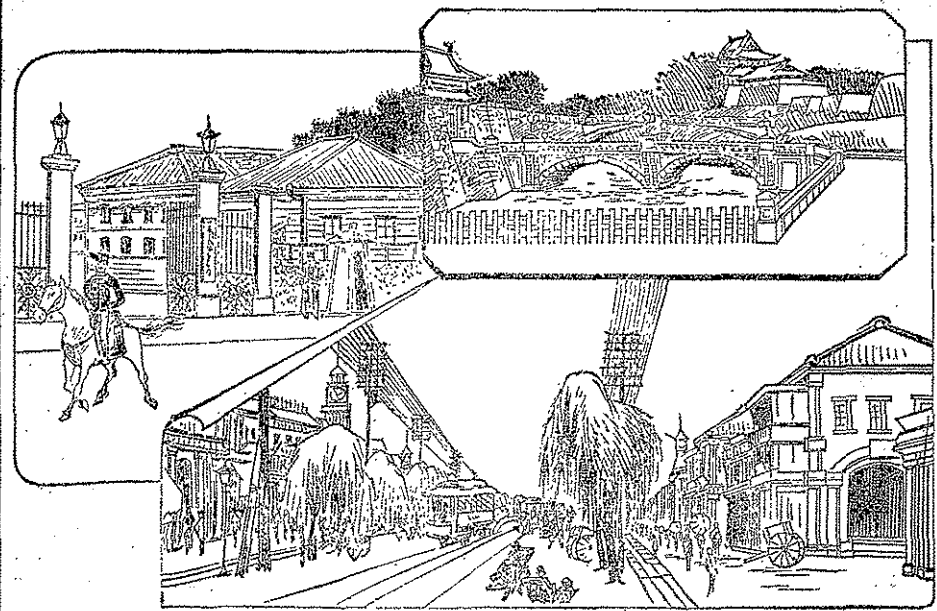
第一 東京見物のあんない

東京は、わが國第一のみやこにして、ひろ  
さ、およそ、三里四方あり。

邊

東京にゆかば、まづ、宮城をはいすべし。  
二重橋のあたりは、砂白く、松青く、四邊もの  
しづかにして、つつしみの心、おのづからお  
こるべし。

通



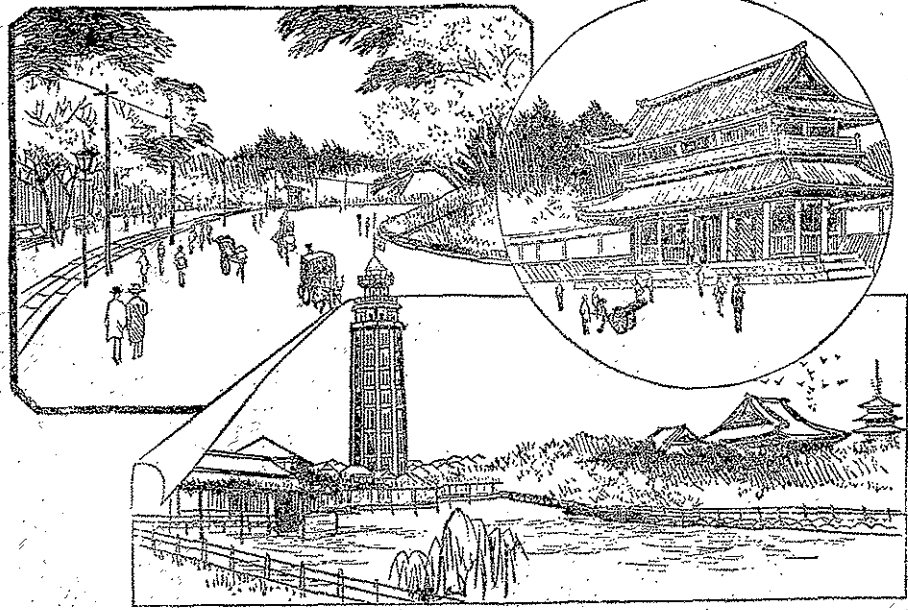
宮城のまはりを丸  
の内といふ。この邊に  
は、やくしよ。兵えいな  
どのたてもの多し。  
宮城に近き九段坂  
の上には、靖國神社あ  
り。

銀座通り、日本橋通

線

公・織

りは、もつとも、にぎや  
かなる通りなり。りっ  
はなる家たちならび、  
電信、電話の線、くもの  
すのごとく、かかり、馬  
車、人力車の往來、あた  
かも織るがごとし。  
芝の公えんには、









デアリマス。

「ソノソバニツクバツテ牛ルシシノヨ  
ナモノハ何デアリマスカ。

「アレハ、日清戦争ノ時、支那カラ取ツテ來  
タコマ犬デアリマス。

「コノ神社ハ、明治二年ニ立テラレタモノ  
デ、ココニハ、日清戦争ヤ、明治十年ノソード  
ーヤ、明治元年ノ戦ヒデ、國ノタメニシナレ

忠義

タ忠義ナ人々ヲマツツテアリマス。

「コノ神社ノオマツリニハ、天皇陛下ノ  
ノゾマセタマフコトガアリマス。

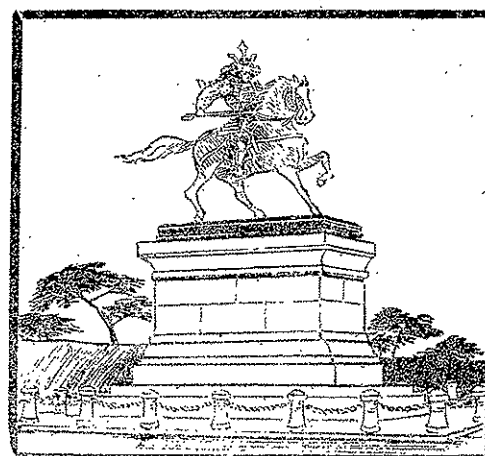
器

「コノ神社ノカタハラニハ、遊就館ユウシュカントイフ  
タテモノガアリマス。ココニハ、イロイロノ  
武器ヲナラベテアリマス。

「武器ノ中ニハ、日清戦争ノトキノブンド  
リ品モ、タクサンアリマス。



れんしゅー第一  
二重橋に近きところにくす  
の木まさしげ公のどー像あり。  
まさしげ公は今より五百年  
ばかり前に、忠義をつくした  
る人なり。

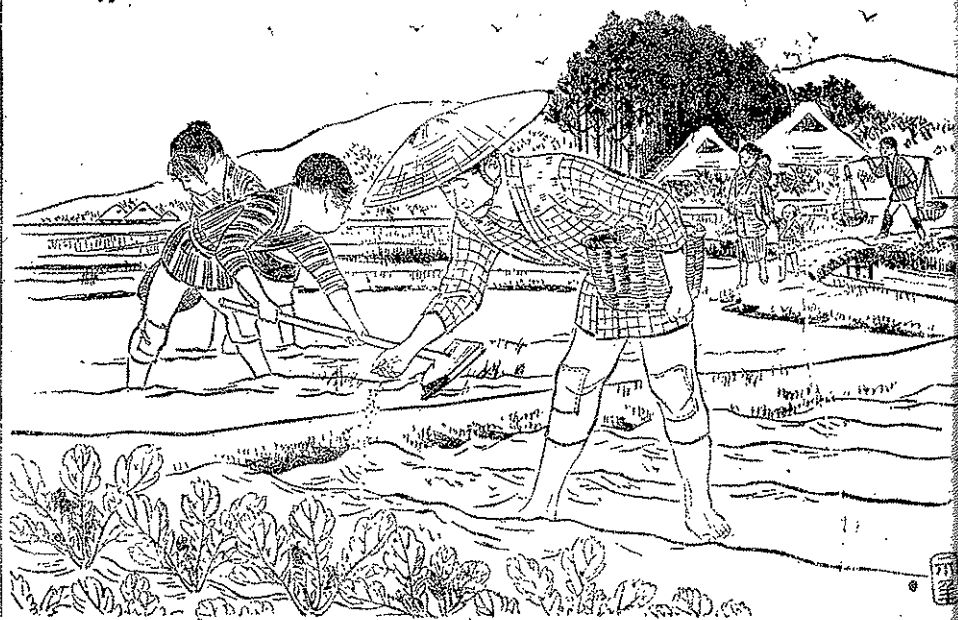


上野公園には、さいごーたか  
もりのどー像あり。たかもり  
は明治のはじめ、國のために  
力をつくしたる人なり。



### 第三 ゐなか

ゐなかはしづかで  
よい。空氣がきれいで  
よい。青々とした野山  
の草木や、きよらかな  
小川の水などを見る  
と、じつにゐなかほど  
よい處はないと思ふ。



處



親 畑

よくできてゐる作物を前にながめ、おも  
しろくさへつづる鳥をうしろに聞きながら、  
親子兄弟がうちをろつて、田畑をたがやし  
たり、たねをまいたりするのは、どんなにた  
のしいことであらうか。

住

住まへる家は、わらやでも、

著て居る著物は、なまつでも、

安

くらしは、らくで安心で、

麥

まめでかせいで長いきで、

國のたからといはれるは、

米麥つくるぬなか人。」

第四 「ゆけゆけ」と「来い来い」

平

昔あるところに、しんだいの同じぐらゐ  
な二人の百しよーがあつた。一人を太平と  
いひ、一人を忠八といった。

太平は、毎朝、くらしいうちに目をさまし、ね



聲

どこの中で大聲をあげて、下男らをよびおこしいそいで、朝めしをくはせた。

下男等がくひをはらぬうちから、太平は、「行け行けとせきたてて、下男等を田畑へやつた。さうして、じぶんは、ゆっくり朝飯をくつて、田畑へ出かけた。

忠八は、毎朝、だれよりも早くおきて、朝飯をくひ、下男等のまだくひ終らぬうちに、し

終

たくをととのへて、「来い来い」といひながら、一ばんさきに田畑へ出かけた。

かうして、十年ばかりたつうちに、太平は、小さい百しよーとなつてしまつたが、忠八は、大をー富み榮えた。

富

この二人のしんだいが、かよーにちがつて來たのは、なぜであらうか。

それは、ただ「行け行け」と「来い来い」のちが

ひである。

レシシュー 第二

神田京一ハ朝早クオキテ、父母  
ニアイサツシ、朝飯が終ルト、學校  
ヘ行ク。

京一ハ、雪ガフル冬ノ日デモ、水  
ガウトナル夏ノ日デモ、毎日タノ  
シク學校ニカヨツテ、一心ニベン  
キヨースル。

ソレユエ、大ソ、親ニモカハエ  
ガラレ、キンジョノ人ニモ、ホメラレテ居ル。



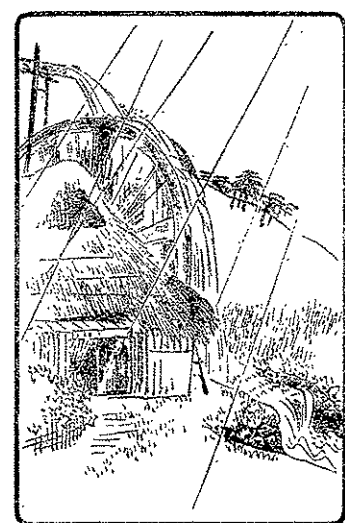
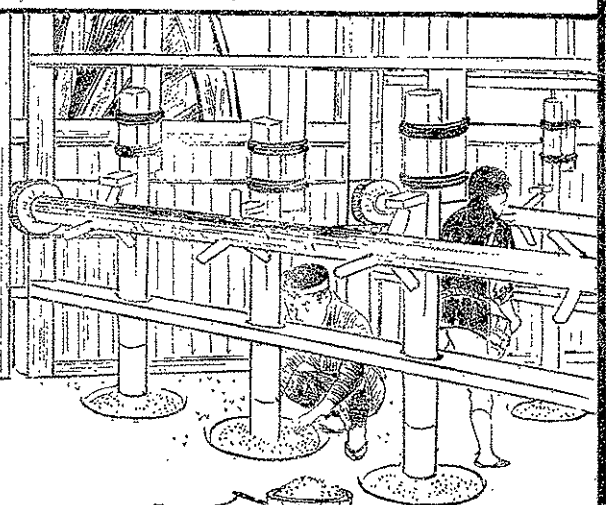
第五 里の小川の水車

里の小川の水車、

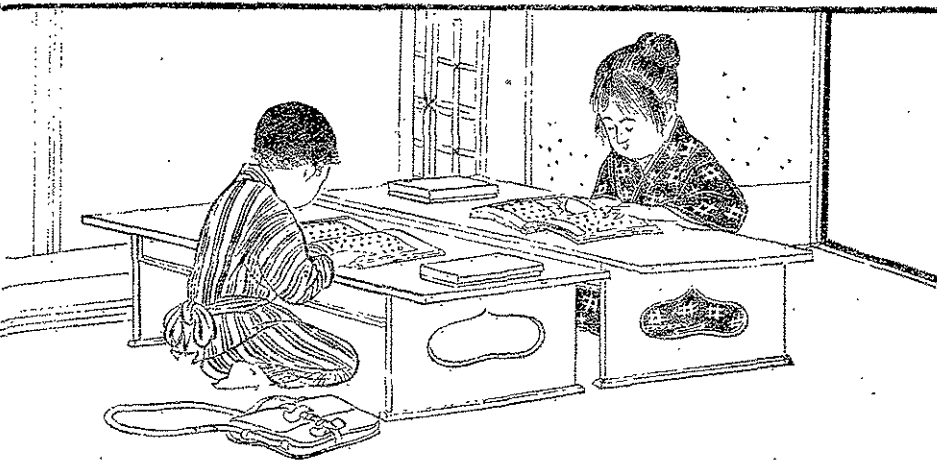
雨のふる日も風の夜も、  
たゆまずやまずめぐりつつ、  
きのふもつきたり數斗の米。

里の小川の水車、

夏はすぎても秋來ても、  
いたがずせかずめぐりつつ、  
けふもつきたり數斗の米。





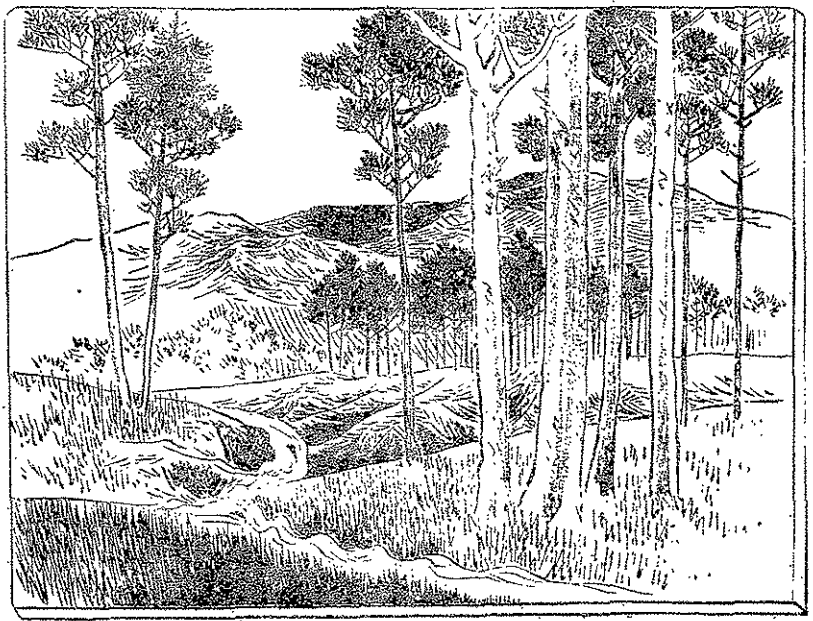


里の小川の水車

月かさなれど年たえど、  
うまずあかすにめぐりつ、  
あすもつくべし數斗の米。  
人の心の水車、  
たゆまずせがすまたあかす、  
めぐりめぐらば學問の、  
米はたくさんつかるべし。

具

材



第六 山林ノハナシ

家ヲタテ、道具ヲツ  
クルニ入用ナルザイ  
モクハ、多ク、山林ヨリ  
キリ出スナリ。

山林ハ、材木ヲ出ス  
外、タキ木、炭ナドヲ出  
シ、鳥獸ナドヲスマセ

マタ雨ヲフラス益アルモノナリ。

山林ハ、マタ、フリタル雨ヲタクハヘテ、ジ  
リ、ジリト流れ出デシムルモノナレバ、シゲ  
リタル山林ヨリ出ヅル川ニハ、大水ヲ見ル  
コト少ナク、マタ、水ノカルルコトモ少ナシ。  
エエニ、山林ハ、ツトメテ、シゲラシムベシ。  
山林ヲシゲラシムルニハ、ミダリニ木ヲ  
キラヌヨ―ニスルヲ第一トス。

ソノ外、年々、苗木ヲウエツクルコト、野火ヲフセグコトナドモ、山林ヲシゲラシムルニ大切ナルコトナリ。

第七　きのことりになをふ

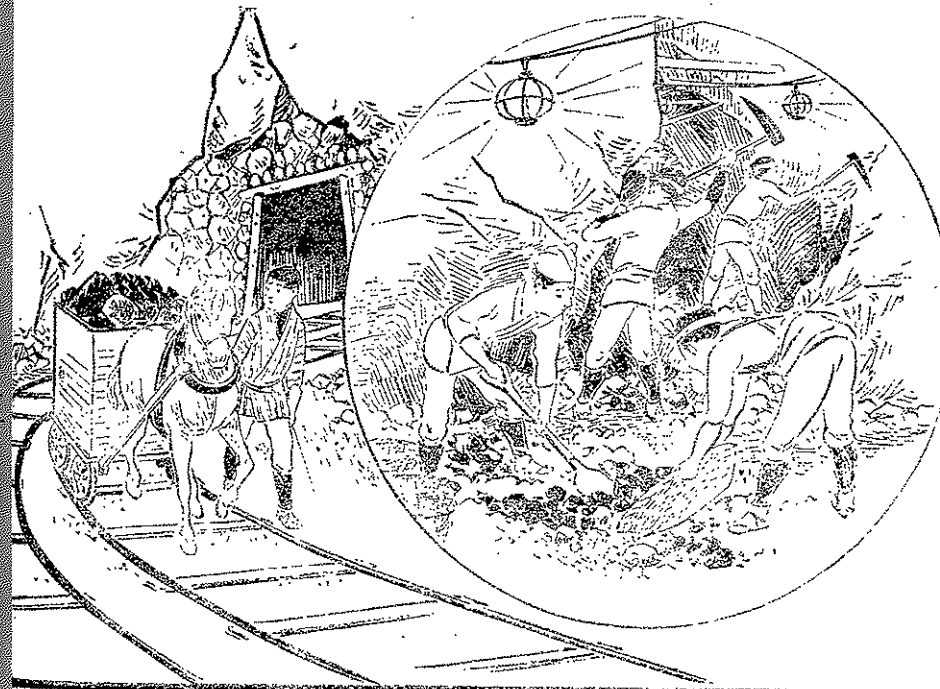
私はあすの朝早く起きて、うらの松林へ  
菌とりにゆきたいとおもひますが、つれ  
がないのでこまつてゐます。もしおぼし  
めしがありますなら、あなたも御一しよ





工業

きの力を用ゐる。じ  
よーきをつくるに  
入用なるたきもの  
は、石炭なり。ゆゑに、  
工業のさかんなる  
ところにては、石炭  
を用ゐることはな  
はだ多し。



焼

石炭は石ににたる炭なり。つーれいの炭  
は、くりならなどのなま木をむし焼きにし  
たるものなれど、石炭は人の作りたるもの  
にあらず。

久 深

石炭は大昔の草木が久しく地の下にう  
づもれて出来たるものなり。ゆゑに、深く土  
をほらざれば、うることあたはず。これをほ  
るほねをりは、炭を焼くよりもはなはだし。



汽

石炭を産する名高き地は九州と北海道となり。かの汽車や汽船のたきものにつみこむ石炭はみなこれらの地より出でたるものなり。

加

石油もまた地の下より出づるものなり。されどはじめてこれをくみ出したるときは黒くしてどろどろとしたる油なるがゆゑに様々に手を加へざればらんぷにともす石油とはならざるなり。

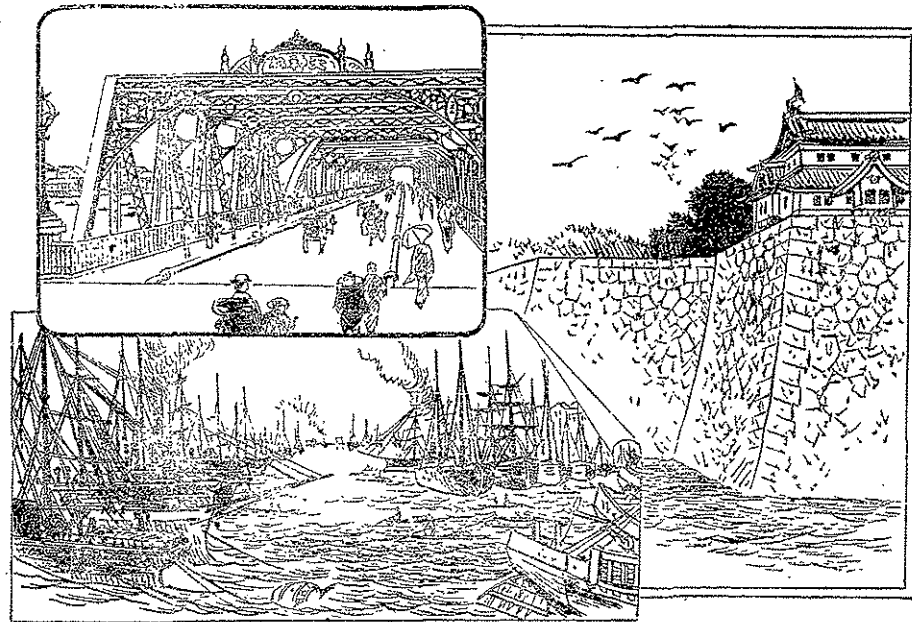
石油は、越後<sup>エチゴ</sup>などより産すれど、石炭のごとく多量に出でざるゆゑ多くは外國より買ひ入るるなり。

第九 大阪ノハンジョー

大阪ハ、仁徳<sup>ニトク</sup>天皇様がハジメテ、皇居ヲオカセラレタ處デアリマス。後ニ豊臣<sup>トヨトミ</sup>秀吉<sup>ヒデキ</sup>公がココニ城ヲキヅカレマシタ。ソノ城

營

市



ハ今モノコツテ兵營  
ニナツテ居リマス。

大阪ハ西ニ大阪灣

トイフ深イ海ガアリ

マスシ、マタ、淀川ヨドガハトイ

フ大キナ川ガ市ノ中

ホドヲ流レテ居マス

ユエ、船ノ出入ガ大ソ

利便

商

ーベンリデアリマス。

大阪ハカヨーニ便利ナ地デアリマスユ

エ、國々ノ產物が、タクサンニアツマツテ來

テ、商ヒノサカンナコトハ、ワガ國デ第一デ

アリマス。工業モ、マタズイブンサカンデア

リマス。

大阪デ見物スベキトコロハ、マヅ、中ノ島

ノ公園、天神テンマ高津コウヅノ宮、生國魂イクニタマノ社、四

天王寺ナドデアリマス。

大阪ニハ、大キナ橋ガアリマス。中デモ、淀川ニカカツテ居ル難波橋、天満橋、天神橋、ハ、三大橋トイッテ、トリワケ名高イ橋デアリマス。

れんしゅー 第一

大阪は、東京に次げる大なるまちにして、汽車、汽船の便利よろしく、商ひのさかんなること、わが國第一なり。

高津の宮は、仁徳天皇様をおまつり申してあるお宮であります。仁徳天皇様は、昔このへんに皇居をおかせられた天子様であります。

第十 かまどのにぎはひ

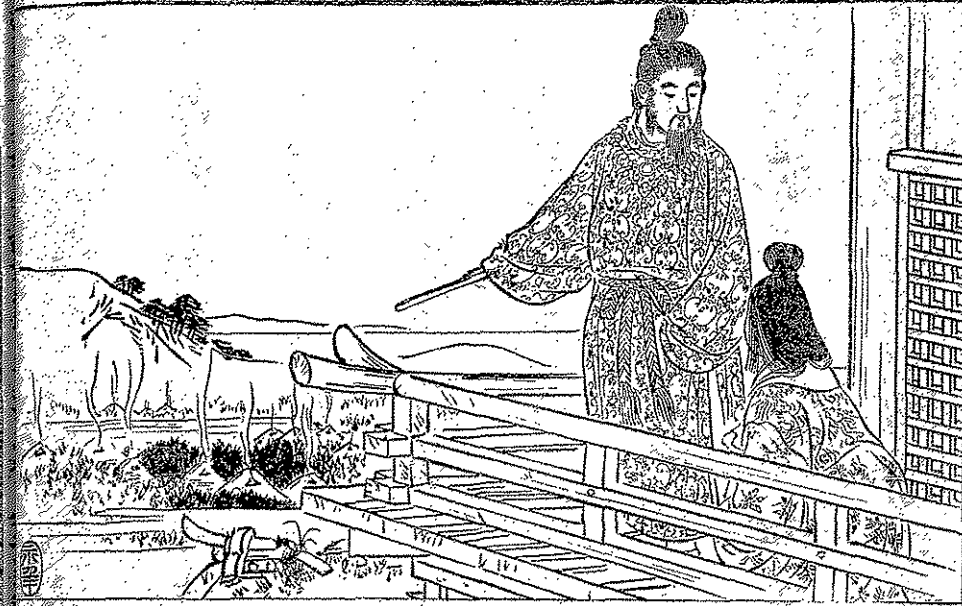
昔、仁徳天皇とて、あはれみの御心ことにふかき、天皇おはしましたり。

天皇ある日、高どのにのぼりて、四方を見渡したまひしに、家々より立ちのぼる烟、少なかりしかば、これ、民の貧しきためならん。

民 烟



殿



とて、三年の間ねんど  
をゆるしたまひ、御殿  
やぶれて、雨もり風と  
ほせど、少しもつくろ  
はせたまはざりき。  
その後、民の家より、  
烟さかんに立ちのぼ  
りければ、天皇これ

露

をごろんじて、大によろこばせたまひ、われ  
すでに富みたり。とのたまひたりとぞ。

玉のみやゐは あれはてて、

雨さへ露さへ いとしげけれど、

民のかまどの にぎはひは、

立つけぶりにぞ あらはれにける。

第十一 少女母をすくふ

昔あるゐなかに、きみといふ少女ありき。

薪

ある日、母とともに、山に薪とりに行きたるに、大なるおほかみ出で、母を目がけて、はしり來れり。

飛

母は、あつとさけびて、うしろにたふれたれば、おほかみは、たちまち、母に飛びかかりたり。

きみは、大におどろき、そこにかけつけて、そばにありたる木のくひをとり、力をきは

谷

めて、おほかみのせなかをうちたり。  
おほかみは、きみの  
一うちにて、深き谷ぞ  
こにころげおちたり。  
よつて、きみは、母をよ  
びおこしたるに、母は、  
すでに、いきたえ居



たり。

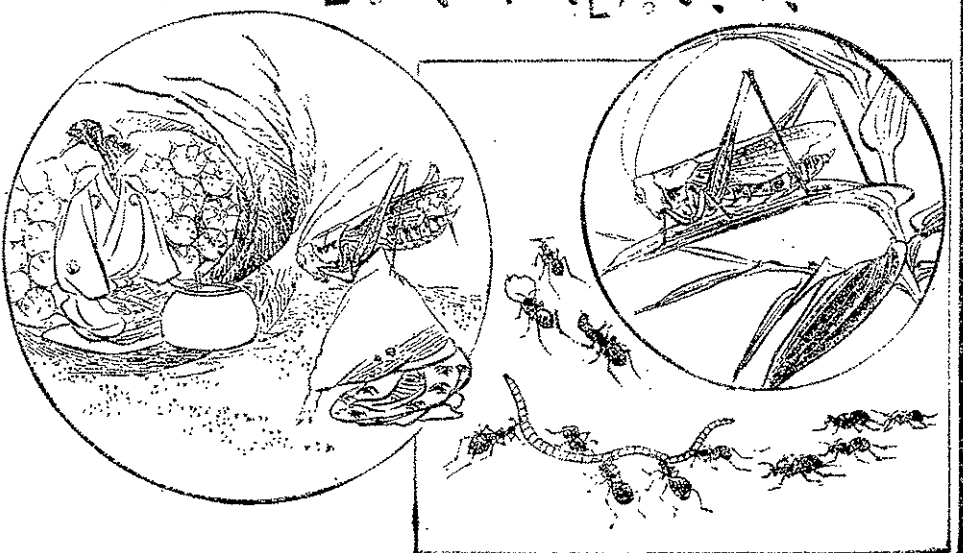
飲

きみは大におどろき、水をすくひて、母に  
飲ませ、せをさすり、むねをなでなどせしか  
ば、母は、やうやく、いきをふきかへしたり。  
きみは、あまりのうれしさに、母にとりつ  
きて、しばらくは、ものをもいはざりしが、も  
し、また、べつのおほかみの來ることもあら  
んとて、いそぎ家に歸りたりとぞ。

れんしゅー 第五

草葉の上のあまき露、

飲みてうたをばうたひつつ、  
野をあちこちと飛びあるき、  
あそびまはるはさきりぎりす。  
夏のさかりのあつき日も、  
少しのひまも休みなく、  
みみずやさとしや飯つぶを、  
ひろうてまはるむしはあり。  
夏さり秋ゆき冬來れば、  
あそべるものは命なし。  
夏さり秋ゆき冬來ても、  
はたらくものは食多し。





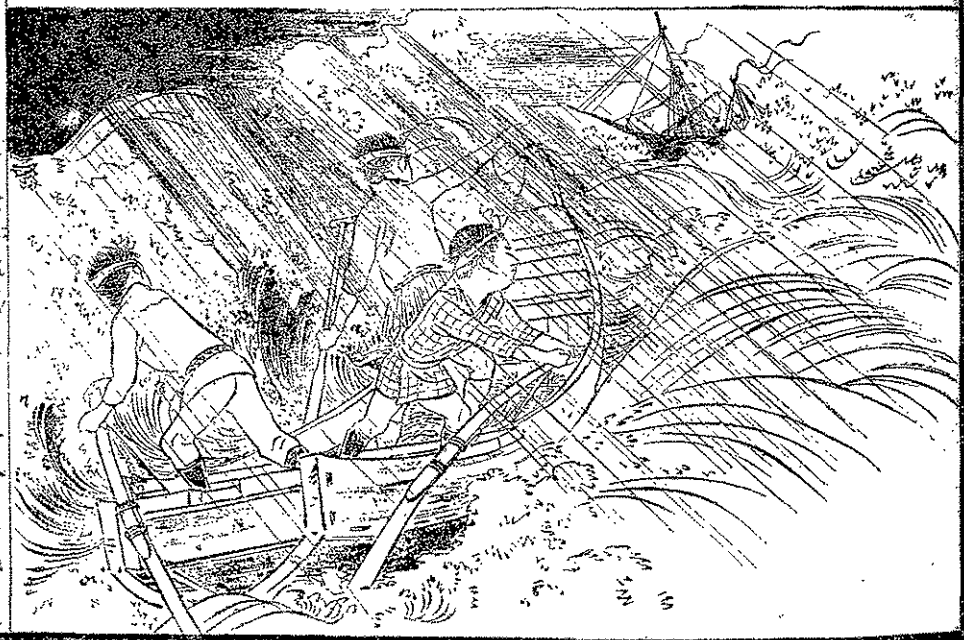
第十二 たすけぶね (一)

あるしけのひに、おきのほーで、なんせんしかかつてゐる一そーのほまつせんがあつた。

はまづのひとびとは、これを見て、たすけぶねをたさうとしたが、ゆかうといふひとがすくないので、こまつてゐた。

このとき、ひとりのこどもが「わたくしを

やつてください。」といひだした。さうして、ひとびとが「としがわかいから。」といつて、とめるのもきかないで、二三にんのせんどーと、あめかぜのさいちーに、いさましくでて



三十八 會社  
月  
いった。

このこどものちちは、せんどーであるひ  
ふなでをしたに、そのひがちょーどけふの  
よーなしけになつて、もう、三ねんばかりに  
もなるが、いまに、かつつてこないのである。  
それをおもふと、このこのははは、わがこ  
を、あやふいところへやりたくはないので  
あるが、ふねがたすけたいばかりに、おもひ  
きつて、このこをだしたのである。

よなかになつて、かぜもなき、あめもやん  
で、うみがやうやう、おだやかになつた。

しかし、たすけにいったせんどーらは、ひ  
とりもかへつてこなかつた。

第十三 たすけふね (二)

ははは、そのこのかへりのおそさに、ああ、  
あのたすけふねさへも、とーとーなんせん

したのか。ああ、かはゆいことをしなしたか。三  
ねんまへには、をっとなうしなひいまた、  
あのこをうしなふとは、なんといふかなし  
いことか。』いろいろしんばいして、かどぐ  
ちをでついたりつしてゐた。

よあけがたになると、わがこは、かかさま、  
かかさま。』とほくからよんでかいつてき  
た。ははは、おおかへつたか、かへつたか。』とよ

びながらかけていっ  
たら、』ととさまがきま  
した。』とてをたたいて  
よろこんだ。  
ははは、おどろいて、  
なに、ととさまがきま  
したとどこに。』とたづ  
ねた。





そのこは、にこにこして、「ゆふべたすけた  
ほまつせんのうち、わたくしのなをよぶ  
ひとがありました。よくみると、それがとと  
さまでありました。わたくしは、うれしうて  
たまらんです。ととさまにだきつきました。  
ととさまは、『よくたすけにきた。』といって、わ  
たくしのあたまをなでられました。」と、はな  
しをしてをるうちに、このこのちちは、むら  
のひとびとにおくられて、なこにきた。

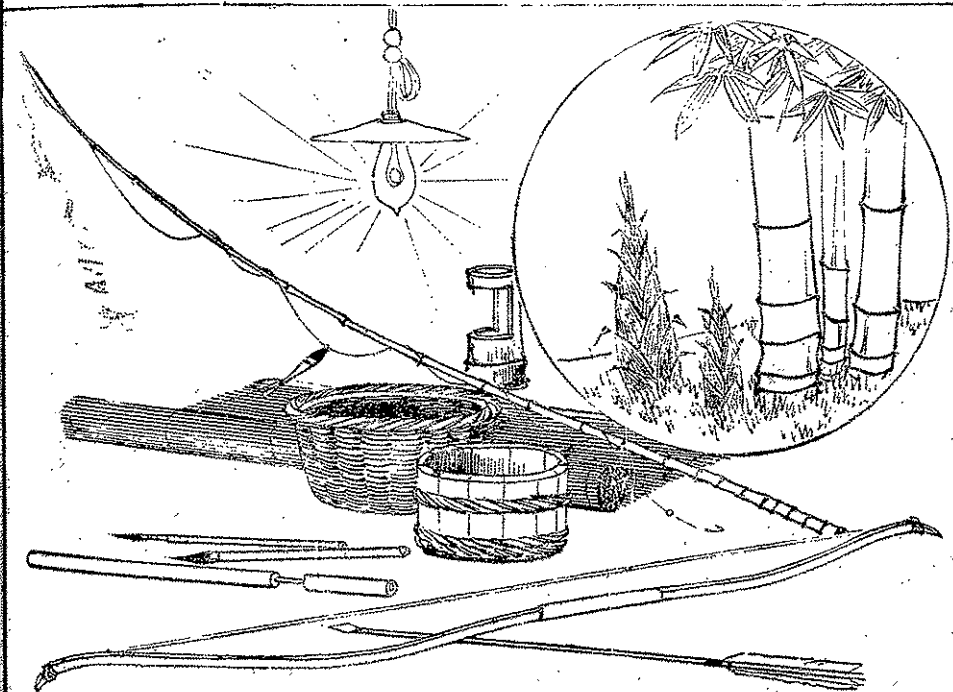
第十四竹

鐵砲 汝 桶

竹ニテ作りタルモノニ、紙鐵砲アリ。ツリ  
ザヲアリ。筆ノチクアリ。弓矢アリ。コレ等ハ  
ミナ、汝等ノ、ヨク知レルトコロナリ。  
コノ外、スダレアリ、カゴアリ。桶ノタガナ  
ドアリ。コレ等モ、マタ、汝等ノ、ヨク知レルト  
コロナリ。

燈

シカルニ、チカゴ  
ロ、ヤウヤク用牛始  
メタルモノニ、竹ヲ  
焼キテ作りタル燈  
心アリ。コレ、スナハ  
チ、電氣燈ノ燈心ニ  
テ、アルヒハ、汝等ノ  
イマダ知ラザリシ



廣

トコロナラン。

竹ハ、カク、廣ク世ニ用ヰラルルノミナラ  
ズ、コレヲウエオクトキハ、年中、青々トシテ、  
人ノ目ヲタノシマシメ、マタ、春ゴトニ、多ク  
ノ竹ノ子ヲ生ジテ、ヨキアデハ、ヒノ食物ヲ、  
我等ニアタフルモノナリ。

第十五 としよりのつぎ木

むかし、徳川家光公といふえらい將軍様

があった。

庭  
このお方がある日、たかかりにゆかれて、  
ふと、とちゅうのある寺へ立ちよられた時、  
八十ばかりのぼーさんが、庭さきで、つぎ木  
をして居た。

自  
家光公は、それをごらんになって、「おまへ  
は、自分の年をかんがへないのか。その木が  
大きくなるまで、おまへは、生きて居られま



い。といはれた。

ぼーさんは家光公  
ともしらずに、「おまへ  
は何をいひなさる。今、  
この木をついでおく  
と、後には大きな木と  
なり、よいくだものが  
たくさんなるであら



う。私はただ寺のためを思ふので、わが身一代のためばかり思つてをるのではないよ。といった。

家光公は、これをきかれて、「おまへのいふことは、もつともだ。」といつて、感心せられた。さうして居るうちに、ぼーさんは家光公ときがついたので、おそれ入つて、寺の内ににげこんだ。

家光公は、これをおよび出しになつて、大それた、その心がけをおほめになつた。

れんしゅー 第六

桃栗三年、かき八年といふことわざがある。これは、桃や栗は、うゑてから三年目、かきは、うゑてから八年目に、くだものになるといふことである。

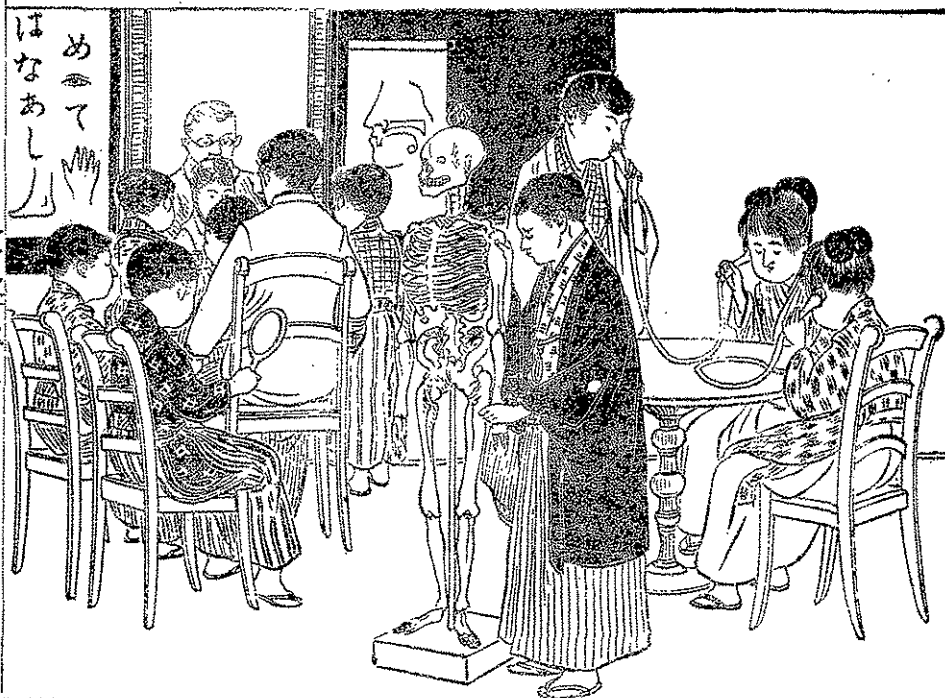
三年とか八年とかいふと長いよーであるが、いつのまにかたつてしまふ。それゆゑ、やしきまはりのあき地などには、なるべく、くだもの木をうゑておくがよい。

第十六

モノイフオシト  
ジヲヨムメクラ

ムカシハオシヤメクラヲ、カタハモノト  
シテ、ステテオキマシタガ、イマデハ、コレラ  
ノモノヲモ、ヒトナミノモノニスルコトガ  
デキルヨーニナリマシタ。  
メクラトオシヲアツメテ、ホトンド、ナミ  
ノヒトノヨーニ、ジヲヨンダリハナシヲシ  
タリスルコトヲヲシヘルトコロヲ、モーア  
ガッコートイヒマス。

モーアガッコー  
ハ、トーキヨーニヒ  
トツ、ゾノホカノト  
コロニ、フタツホド  
アリマス。  
ソレユエ、イマカ  
ラノチニハ、モノイ  
フオシモ、ジヲヨム



めて  
はなあし

メクラモ、ダンダン、フエデマキリマス。  
カタハノモノデサヘ、ヒトナミノハタラ  
キガデキルヨ、ナアリガタイニヨニ、メモ  
ミエ、モノモイヘルワレワレガ、ガクモンヲ  
オコタツテ、オシヤ、メクラニモオトルヨ、  
ナモノニナツテハ、ヨイカラダヨクダサッ  
タチチハハニ、マウシワケガアリマセン。

第十七 學校用品

種

我等が毎日、學校にて用ゐる品物は、種々  
あれども、そのおもなるものは、筆、えんぴつ、  
紙、墨、硯、石板などなり。

毛

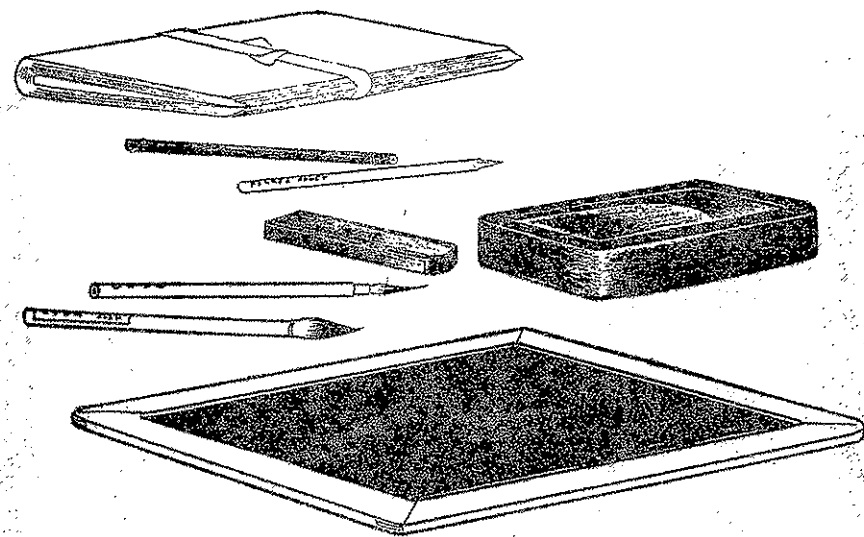
筆は、獸の毛をほとなし、竹をちくとなし  
て、作りたるものなり。

棒

えんぴつは、石墨といふものをかため、  
ほとき木の棒の中に入れたるものなり。  
墨は、油煙をにかはにてとき、これをかた

に入れて、かためたるものなり。

硯は、墨をするに、つごよきよーに、石をくぼめたるものなり。紙は、おほくは、かうぞみつまなどの皮をすきて作る。中には、



皮

ぼろやわらなどをすきて作りたるものもあり。

石板は、石板石といふ石を切り、木のわくにはめて作りたるものなり。

これ等の学校用品は、大切にとりあつかひ、少しもむだにせぬよーに、心がくべし。

借

第十八 本を借る

この間、おうちで見せていただきました



貸 以

作文の本がおあきでありますなら、二三日、お貸し下さいませんか。勝手でありすが使を以て、御ねがひ申し上げます。

十二月二十四日

廣田よし

石川きよ様

返事

不

お申しこしの作文の本は、お使にお渡し申しました。さしあたり、不用であります

から、どうぞごらんなさいませ。

十二月廿四日

石川きよ

廣田よし様

第十九 雪

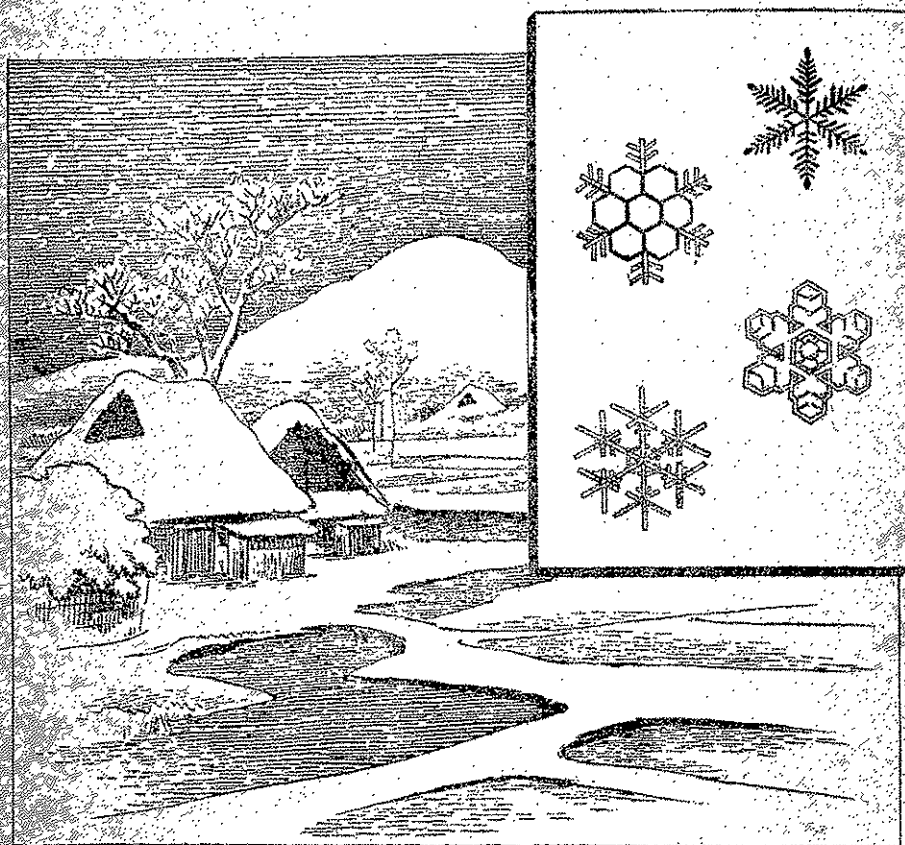
空氣中ノ水氣が寒サニアフト、雲トナル。雲が、モウ一ソー強イ寒サニアフト、雪トナ  
節ル。ユエニ、冬ノ寒イ時節ニハ、時々、雪ガフル。雪ハ、チヨット見ルト、タダ、白イバカリデ

梅

アルガ、ヨク氣ヲツケテ見ルト、花ノカタチ  
ヲシテ居ル。梅ヤサクラノ花ビラハ、五ツデ  
アルガ、雪ノハ、六ツデアル。ソレユヱ、昔カラ  
雪ヲ六ツノ花トモイッテ居ル。

コノ六ツノ花ガ、カレ木ニ花ヲサカセ、野  
ヲウヅメ、山ヲツツンダアリサマハ、玉ヤ銀  
ナドカラ出来タ世界カトオモハレルホド、  
リッパデアル。

景 稻 害



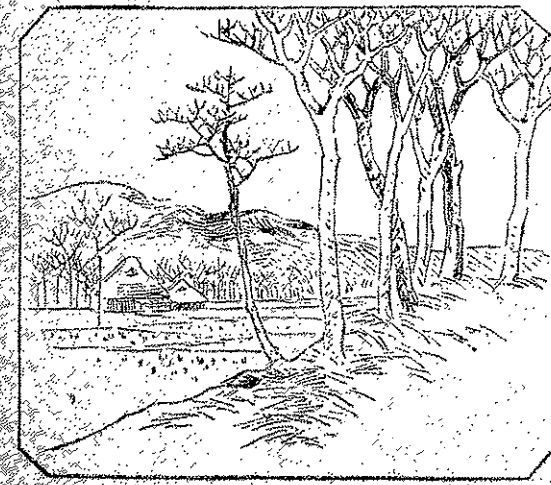
雪ハ、コノヨ  
ーニ、景色ヲヨ  
クスルバカリ  
デハナイ。稻ヲ  
害スル虫ノ卵  
ヲコロシ、マタ  
麥ヲオホウ云  
シモノ害ヲフ

根

セギ、麥ヲオシツケテ、ソノ根ヲ強クスルナ  
ド、大ソー、作物ノタメニナル。ソレユエ、昔カ  
ラ、雪ヲホー年ノシルシトイッテキル。

れんしゅー 第七

寒い時節となりました。  
草はかれ、木の葉はおちて、山  
のすがたも、野の景色もまこ  
とに、さびしくなりました。  
桃やさくららのさくまへには、  
まだ、よほどの月日がありま  
せう。



陸

第二十 なんぎはくすり

陸軍少將に福島安正フクシマヤサズチといふ人がありま  
す。この人はある時、ただ一人でシベリヤと  
いふごく寒いところを馬にのって旅をせ  
られました。

旅

ある時、少將は多くの人の前でつぎのこ  
とをはなされました。

半

「私は、半年も、なんぎな旅をして、たまつな



ものもたづめました。つ  
らい雪みちもとほり  
ました。とまるところ  
がなくて、野山にもね  
ました。ある時は馬が  
こごえて、しにさうで  
ありました。自分も、生  
きながら、雪にうづめ



られるかと思ひました。

病

宿

しかし、その時には、一度も病にかかりま  
せんでした。私が病にかかりましたのは、よ  
い宿屋にとまったり、うまいものをたべた  
りして、寒いめにも、なんぎなめにもあはな  
い時でありました。して見ると、なんぎとい  
ふものは、かつつて、からだをじよーぶにす  
るくすりであるといふことがわかります。



第二十一 大椿ダイチン

昔九州に大椿といふ學問のすきな人があつた。ある時大椿は四書や五きよなどといふ書物を讀みたいと思ひ立つた。しかし、そのころは書物が少なくて、とてもこれ等の書物を手に入れることが出来なかつたので、大椿は大を、力を落した。ところが常陸トコノの國には、その書物をもつ

て居る人がある。といふたものがあつた。大椿は大を、喜んで、はると常陸の國へ出かけた。さうして、持主をさがしあてて、これ等の書物を借りた。大椿は、その書物を



讀んでしまはぬ中に、錢がつきて、どうすることも出来なくなった。

豆

ある人が、これを氣のどくに思つて、豆を一斗くれたゆゑ、大椿は毎日、その豆を一にぎりづつたべて、一心にべんきよーした。五十日ばかりたつと、その豆もつきたので、大椿は、しかたなく、九州へかへつた。

類

その後、大椿は、親類や友だちから、わづか

な錢を借りて、また、はるばると、常陸の國へべんきよーにいった。

大椿は、かよーに、學問にせい出したゆゑ、後には、りっぱな學者になった。

レシシエー 第八

大椿ハ九州ノ人ナリキ。ワカキ時、常陸ノ國ニイタリテ、人ノ本ヲ借り、豆ヲ食ヒテ、ウエヲシノギナガラ、一心ニベンキョーシテ、ツヒニ、名高キ學者トナリタリ。

第二十二

紀元節

祝



今日は、二月十一日  
であります。家ごとに  
國旗を立てて居るの  
は、紀元節を祝ひたて  
まつるしるしでござ  
います。

紀元節とは、わが國  
第一代の 神武天皇

位

様が御位につかせられた日でございます。  
神武天皇様は、はじめ日向ヒウガの國において  
なさいました。

苦

そのころ、東の國には、あるものどもがは  
びこつて、人民を苦しめて居ましたゆゑ、  
天皇様は、御自分で、大將となつて、御せいば  
つにお出かけなさいました。

天皇様は、みちみち、わるものどもをおう

あなされてつひにながすねひこといふ強いぞくをおほらばしなさいました。

建

そこで、天皇様は大和の國の橿原に御殿をお建てなさいまして、天皇の御位につかれました。それは、今から二千五百六十年あまり前の今月今日にあたります。

謹

紀元節は、かよいなめでたい日でありますゆゑ、わが大日本帝國の人民は、謹んで、こ

遠 征

の日をお祝ひ申さねばなりません。

第二十三 神武天皇の御東征

思へば遠し三千年、神武のみかどはかしこくも、東のえびすうたんとて、日向の國を出でたまふ。

敵

御船の進むところには、さかまきさわぐなみもなく、御旗のひらめくところには、てむかひ來る敵もなし。



導

大和に著かせたまふ時、そこをかためし長髓彦ナカスネヒコあるものどもをよせあつめ、道をばふさぎたてまつる。

み空にかけらやたがらす、よくみいくさを先導し、みはずにとまれる金のとびできのまなこをくらませり。

かかるふしぎのしるし見て、みいくさ大に勇みたち、力あはせてうちしかば、

都

あだはたちまちほろびたり。

かくてめでたくさだめます、都はやまとの檀原や、よよにかはらぬ國のもと、たてたまひしぞありがたき。

れんしゅー 第九

紀元節は、神武天皇様が、大和の檀原で御位につかせられためでたい日であります。それゆゑ、わが國の人々は、この日を祝ひたてまつつて、その御恩のほどを思はねばなりません。

第二十四 キンシクンショー

勲章

コレハ、何トイフ勲章デアリマスカ。

金鷄<sup>キンシ</sup>勲章デアリマ

ス。



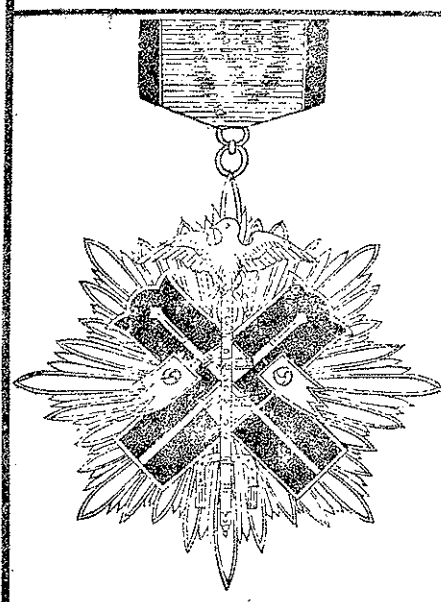
コノ勲章ニトビノ

ツイテキルノハ、ナゼ

デアリマスカ。

ソレハ、神武天皇

様が、ワルモノドモヲ



ゴセイバツナサレタトキ、次ニ書イテアル  
ヨーナコトガアツタユエ、ソレカラトツタ  
ノデアリマス。

神武天皇様が、ワルモノドモヲゴセイバ  
ツナサレタ時、ニハカニ、天ガクモリ、雨ガフ  
リ出シテ、アタリガ、マツクラニナリマシタ。  
コノヲリドコカラカ、金色ノトビガトン  
デ來テ、御弓ノハズニトマリ、キラキラト、光

リヲハナツテ、敵ノ目ヲクラマシマシタ。コレガタメニ、神武天皇様ハソノイクサニ、才勝チナサルコトガデキマシタ。

授 金鵄勲章ハ、カヨーナコトカラトツテ、オコシラヘニナツタモノユエ、イクサノテガラノスグレタ人ニカギツテ御授ケニナル、キハメテ、タフトイ勲章デアリマス。

第二十五 宇佐の御使

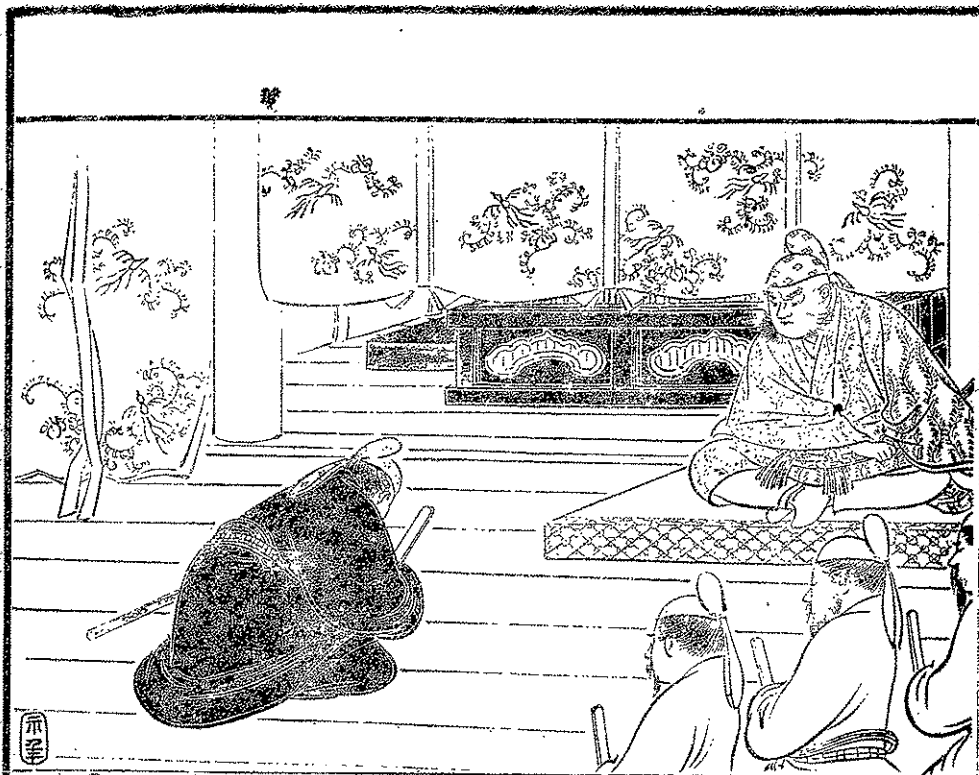
僧

昔、道鏡ミチカミといふ僧ありき。天皇の御ちよーあいに心おごりて、いろいろわがままなるふるまひをなしたり。

告

そのころ、筑前國太宰タザイの主神、道鏡ミチカミにへつらひ、神の御告なりとて、「道鏡を天位につかしめば、天下よく治まらん。」と、天皇に申し上げたり。

天皇は、これをきこしめされ、さらに、神の



御告をこひたてまつ  
らんとて、和氣清麻呂  
公を宇佐につかはし  
たまひたり。

公は、宇佐より歸り  
來て、「わが國、昔より、君  
と臣との分ちあり。む  
ほんをたくむものは、

早くのぞけ」と、神の御告ありしよしを申し  
上げたり。

怒

道鏡は、これを聞きて、大に怒り、公をけが  
れまろと名づけて大隅の國に流したり。

次の 天皇の御代となりて、公は、都にめ  
しかへされ、道鏡は、下野の國に流されたり。  
京都の護王神社は、すなはち、この和氣清  
麻呂公をまつりたる社なり。



れんしゅー 第十

和氣清麻呂公は、忠義の人なりき。道鏡が、天皇の御  
ちよーあいに心おごりて、わがまなるふるまひを  
なし、天位につかんとしたる時、宇佐にまゐりて、神  
の御告をうけつひに、道鏡をのどきたり。  
京都の護王神社は、公をまつりたる社なり。

をはり

明治三十四年六月廿五日印

同 年六月廿八日發行

明治三十四年八月四日訂正再版印刷

同 年八月八日訂正再版發行

新編國語讀本 尋常科

定價		價	
甲種	卷一	八錢	十二錢
乙種	卷一	九錢	十三錢
卷二	十錢	十四錢	十五錢
卷三	十一錢	十六錢	十七錢
卷四	十二錢	十八錢	十九錢
合計		金九十九錢	

著者 小山 左文二

著者 武島 又次郎

東京市日本橋區吳服町壹番地

印刷者 株式會社普及舎

右社長

代表者 山田 禎三郎

東京市神田區南桑物町十番地

發賣所 帝國書籍株式會社

明治三十四年八月十六日  
文部省檢定濟

不許複製

